

調査研究の内容及び方法

(1) 調査の実施時期・対象・方法

①児童・生徒対象調査（平成17年9月実施）

都内の小学校、中学校、高等学校、計21校の小学校4年生、小学校6年生、中学校2年生、高等学校2年生の児童・生徒、合計2065名を対象にして、調査紙法により実施した。

②教員対象調査（平成17年7月実施）

都内の小学校、中学校、高等学校、計25校612名を対象にして、調査紙法により実施した。

(2) 調査研究の内容

①児童・生徒の心の発達とメディア環境等との関連についての調査

児童・生徒のメディア利用の実態と、社会性・自尊感情等の心の発達との関連について、道徳の内容項目を中心にして質問項目を作成し、実施した。

②教員のメディア利用の実態と意識についての調査

教員のメディア利用実態、児童・生徒のメディア利用実態の把握、情報モラル授業の実践の有無等の調査を実施した。

(3)分析に際して(分析手法及び外れ値等について)

本研究では、「児童・生徒用」及び「教員用」調査の2種類を実施している。前者についてはメディア等を長時間使用することにより児童・生徒の心の発達に何らかの影響があると仮定して調査を実施した。また、調査結果を分析するにあたっては、各項目の単純集計を行うとともに、メディア等接触時間と道徳等の質問項目(5~31)について、二重クロス集計(分割表)による「pearsonの χ^2 検定」を行った。単純集計の際には、「5~31」の項目に対して、すべてを同一の選択肢で回答(27/27個)または26個の設問を同一の選択して回答(26/27個)者をデータに歪みをもたらす「外れ値」として分析から除外している。その根拠としては、質問項目が「順項目」25個、「逆転項目」2個から成っているからである。また、不適切な回答として除外したものは携帯電話の使用開始年齢を例えば中学2年生に質問しているにも関わらず、高校2年生を使用開始時期として選択している回答者の回答である。除外した具体的データ数は下表の通りである。

外れ値基準	27個同一	26個同一	不適切回答数
小4	1	0	0
小6	1	0	1
中2	4	1	1
高2	3	1	0

「pearsonの χ^2 検定」を行う際には、発達段階に応じて影響を明らかにするために、小4、小6、中2、高2と場合わけしながら行っている。また、児童のアンケート回答を4件法から2件法に置換し分析した。使用時間については「0分/30分/1時間/2時間…」のような回答を求めたが、例えば「1時間未満と1時間以上」や「0分/1時間未満/1時間以上2時間未満/2時間以上」など様々なカテゴリー化を行い分析を実施している。

後者の教師用調査については、例えばメディア接触時間が長い程、情報モラルの授業を行っているかと仮定して調査している。教師回答には外れ値は特別みられないため、すべての回答を分析に用いている。